

# 狩猟文を持つ土偶について

## ー福島県本宮市高木遺跡出土の土偶からー

大河原 勉

### 1 はじめに

まほろん（福島県文化財センター白河館）は、「遺跡から学ぶ自然と人間のかかわり」をメインテーマとした、“見て・触れて・考えて・学ぶ”体験型フィールドミュージアムであるとともに、5つの大きな役割も担っている。その内の1つが、埋蔵文化財の収蔵・保管や活用である。

今年度も、まほろんに収蔵されている埋蔵文化財を活用した「体験学習」や「文化財研修」が開催され、当館に収蔵された「土偶」に関連する講座類（実技講座「土偶づくり」、文化財研修入門考古学講座Ⅰ「信仰の考古学」、同講座Ⅱ「福島県の宝物～土偶～」）も行われ、多くの受講者にご参加いただいた。

福島県本宮市高木遺跡出土の土偶は、文化財研修の中で展示・紹介され、狩猟文を持つ土偶として、注目を集めた土偶の一つである。今回は、文化財研修時に紹介のみに留まった高木遺跡出土の狩猟文を持つ土偶の文様やその系譜等についての報告である。

なお、報告するにあたり、県内の市町村名については、合併後の新名を用いているが、県外については調査報告時の市町村名で明記している。

### 2 遺跡の概要

狩猟文を持つ土偶（図1）は、福島県本宮市本宮字高木に所在する高木遺跡9区から出土した。高木遺跡9区は、平成の大改修工事にかかる本宮市の阿武隈川右岸築堤工事に伴い平成11年度～12年度にわたり発掘調査が行われ、飛鳥時代を中心とした集落と縄文時代中期後葉～後期前葉にかけての集落が確認された。いずれの時代も、当該地域の中心となる集落であり、多くの遺構に伴って、遺物も多数出土している。

この内、縄文時代の遺構は、竪穴住居跡117軒（複式炉64軒、石囲炉19軒、敷石住居18軒、地床炉3軒、その他14軒）、土坑235基、屋外焼土遺構8基、配石遺構66基、土器埋設遺構91基、屋外ピットなどが検出されている。

また、遺物は、縄文時代中期後葉から後期前葉の土器（縄文土器片約121,100点）を中心に、土製品（約460点）、石器・石製品（約1,300点）が出土している。

土偶は、破片資料も含め20点出土している。土偶の大半は、遺物包含層からの出土で、用途が判断できる出土状況にあるものは少ないが、高木遺跡土偶集成（図2）に示した5・6は配石遺構に伴って出土している。特に、5は配石遺構上に伏せられた状態で見つかっている。

狩猟文を持つ土偶は、遺物包含層からの出土である。土偶が出土した包含層には、縄文時代中期後葉～後期前葉の遺物が含まれている。

高木遺跡9区からは、狩猟文を持つ土偶以外に、図2に示したような土偶が出土している。出土した土偶については、平成15年度に刊行された報告書（筆者が担当報告）の中で、形状や文様などから大きく3つに大別した。（高木遺跡2003）

1つは、同図1～4に代表されるような板状を呈した中実・中空の土偶で文様が施文されるもの。1・2は、胴部の形状が奴舂状を呈し、脚部に台座が付く。1～4に施文される文様については、共通する点も認められるが、正面に「Y」字隆帯が施されている点（4）や、幅の広い凹線（1～3）で施文されるなど、相違点も認められる。この他に、同図5・6のような板状を呈した中実土偶で、文様が施文されないものと、同図8・9に見られる所謂「ハート形土偶」に形状に近いものが認められる。

これらの土偶については、形状や施文される文様、施文方法、検出状況などから1～4は縄文時代中期後葉～末葉、5～7が後期初頭、8・9については後期初頭～前葉に帰属するものと考えている。

### 3 狩猟文を持つ土偶

#### 1) 資料概要（図1）

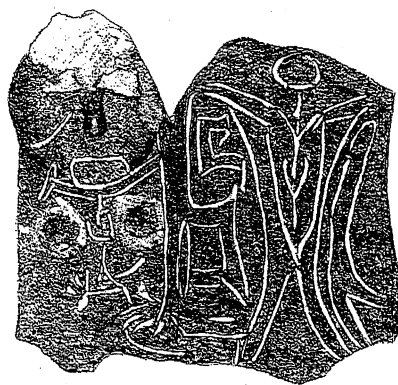
ここでは、報告対象となる狩猟文を持つ土偶の概要について述べる。土偶の形状は、棒状を呈しているが、土偶下端には、接合痕が認められることから、突起のような形で土器などに付いていたか、あるいは台座のようなものを有していた可能性もあり、本来の形状については不明である。土偶の断面形は、隅丸方形状となり、板状土偶の断面形態に近い。大きさは、遺存値で最大長8.7cm、最大幅、3.5cm、最大厚3.0cmを測る。

狩猟文を持つ土偶については、棒状の形が男性性器を象っているようにも見て取れる。また、体部中央には乳房も表現されていることから、この土偶については、男女両性を1つの土偶で表現したものと考えられる。

形状については、縄文時代後期初頭～前葉に関東地方で認められる所謂「筒形土偶」に近い。顔の表現についても、土偶上部を面取りした後、粘土を両脇に貼り付け「筒形土偶」や「ハート形土偶」の特徴でもある上向き気味の偏平な顔を作り出している。しかし、本資料について



1a 実測図（S=1／2）



1b 展開模式図

図1 高木遺跡出土狩猟文土偶

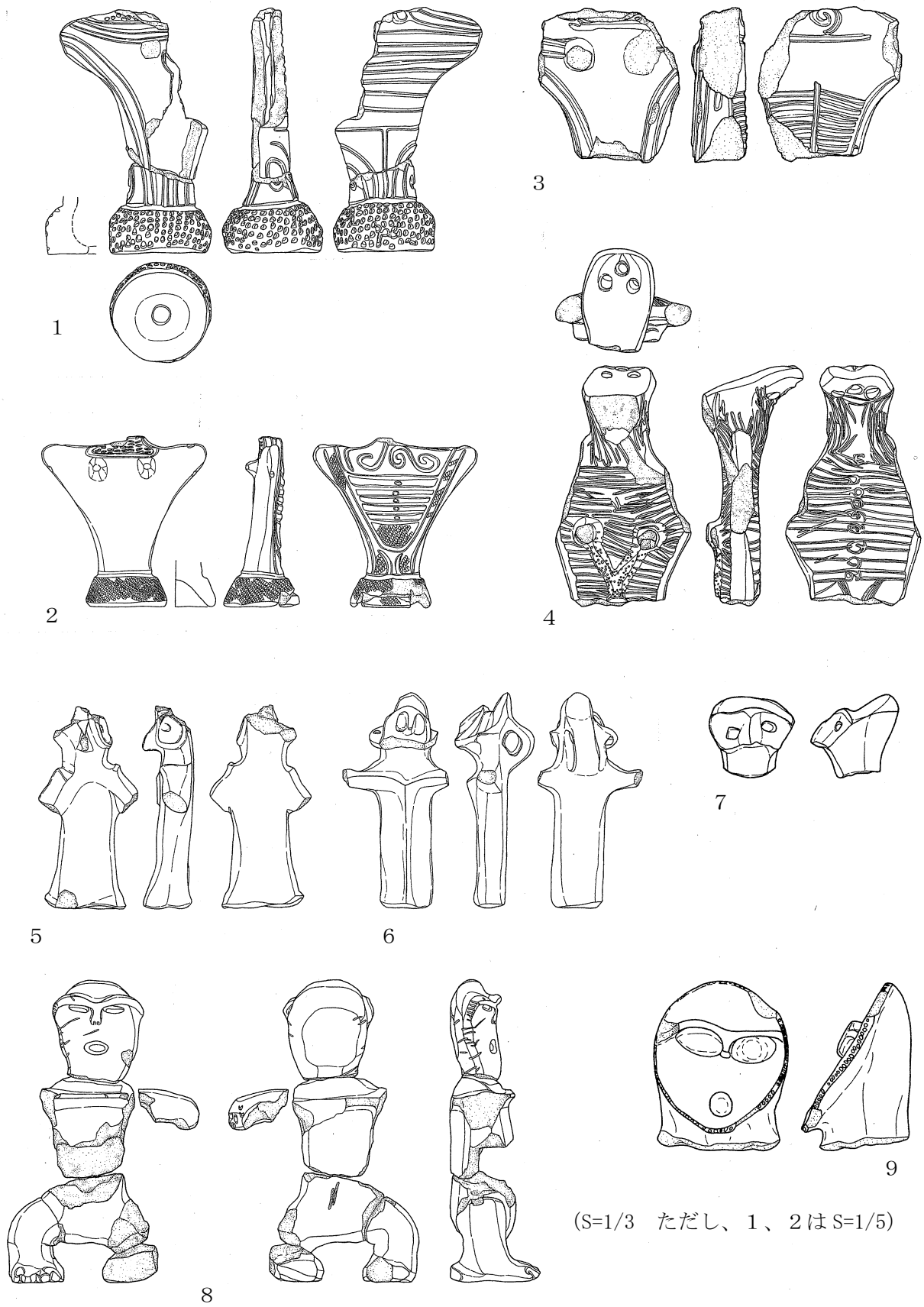


図2 高木遺跡土偶集成

は「筒形土偶」の多くが中空で、断面形が円形を呈している点で大きく異なる。

次に土偶に施文された文様について述べる。文様は、鼻と乳房と目以外、いずれも幅の狭い沈線で施文されている。なお、鼻と乳房は粘土を貼り付けて表現している。工具は、沈線の観察から先の細い棒状の工具と角棒状の工具を用いたものと考えているが、同一工具を部分的に使い分けたのかもしれない。

土偶の顔については、やや幅広の沈線で目を真横に描き、目と直行するように粘土を貼り付けて鼻を作りしている。口は楕円形状を呈している。また、右頬に見られる斜めの沈線は、刺青のように見える。

胴部には、両面及び側面に文様が描き出されている。正面の文様は、顔の口に当たる楕円形を起点に文様が描かれている。正面の文様を詳しく観察すると、本来土偶の口を表す楕円形が頭、両脇に横位に描かれた2本の沈線は腕、楕円形の下端に方形状に施文された短沈線は胴、この方形状の文様から、「人」字状に描かれた沈線は、脚を表したように見える。また、右腕の先端には「弓」、左腕には、「矢」か「槍」あるいは「釣り竿」のようなものが描かれている。これら正面に見られる文様は、まるで人が狩猟に関係する道具を持って、万歳をしているような構図となっている。

背面についても正面と同様に人物を模した文様が観察できる。頭部は円形に表現され、頭部から沈線を垂下させ頸部を表す。胴部は「V」字状に描かれ、「V」字内部には、胸部と腹部を区別するのか「Y」字を2つ連結させている。腹部の「Y」字については、縮小過程で潰れてしまうため、報告時には繋げて表現しているが、本来は幅細の短沈線を6本繋げて「Y」字を構成している。腕は、正面の文様と同様に2本の沈線で表現される。脚については、長めの沈線で「ハ」字状に描き出されている。

背面に描かれた人物の両腕にも、正面と同様に狩猟に関係する文様が施文されている。右腕（胴部側面）には、まるで獣が吊るされているような文様が沈線で描かれている。（側面の剥離した部分については、沈線の痕跡が認められたため、復元して模式図にして表した。）

獣の顔に当たる部分には、「J」字状の文様が牙のように表現され、「猪」を連想させる。左腕についても、獣が吊るされているようにも見えるが、下端には尾びれや背びれのような文様が描かれていることから、魚（サケ）と考えている。（福島県田村市岡平遺跡の中期末葉の住居跡複式炉石囲部にはサケが線刻された礫が転用されている。岡平遺跡 1998）

背面に描かれたこれらの獣（猪）、魚（サケ）は、縄文時代には欠かせない狩猟対象物であり、正面に描かれた狩猟具に背面の狩猟対象物が対応することは、大変興味深い。

表 1 東北地方狩猟文遺物出土遺跡一覧

No	遺跡名	所 在 地	遺 物	時 期	備 考	No	遺 跡 名	所 在 地	遺 物	時 期	備 考
1	上ノ台A	福島県飯舘村	深鉢片	中期末葉	住居内堆積土	9	丹後谷地1・2	青森県八戸市	深鉢	後期初頭～前葉	住居内堆積土
2	和台	福島県飯野町	深鉢	中期末葉	住居内堆積土	10	菰窪	青森県八戸市	深鉢	後期初頭	住居内床面
3	間沢	青森県平舘村	壺形	後期前葉	遺構外	11	西山	青森県福地村	壺形	後期初頭	再葬墓甕棺
4	小牧野	青森県青森市	鉢形	後期初頭～前葉	住居内堆積土	12	馬立Ⅱ	岩手県二戸市	壺形	後期前葉	土坑、遺構外
5	山野峠	青森県青森市	壺形	後期前葉	再葬墓甕棺	13	米沢	岩手県二戸市	壺形	後期前葉	遺構外
6	沖附(2)	青森県六ヶ所村	深鉢片	後期初頭～前葉	遺構外	14	館Ⅳ	岩手県北上市	深鉢	中期末葉	住居内堆積土
7	湯の沢1	青森県六ヶ所村	深鉢	後期初頭～前葉	遺構外	15	江ノ上B	福島県田村市	線刻礫	後期中葉～後葉	遺構外
8	上尾駸(2)	青森県六ヶ所村	深鉢片	後期初頭～前葉	遺構外	16	山ノ神	福島県郡山市	線刻礫	後期後葉	表面採集

## 2) 県内及び東北地方出土の狩猟文（図3、表1）

次に、福島県を含めた東北地方の狩猟文を持つ遺物について見てみる。東北地方から出土する狩猟文を持つ遺物には、図3に集成したような狩猟具及び狩猟対象動物などをモチーフにした特殊な土器、所謂「狩猟文土器」がある。

「狩猟文土器」については、表1に示したように分布が東北北部の青森県や岩手県に集中し、時期も中期末葉～後期前葉といった限られた時期の出土が目立つ。出土状況を見ると、甕棺以外は、住居跡の埋没過程に廃棄される状況にあるものが多く、土器も赤彩されているなどその特異性が窺える。

県内の狩猟文を持つ遺物には、飯舘村上ノ台A遺跡（上ノ台A遺跡2次1990）及び飯野町和台遺跡（和台遺跡2003）から出土した「狩猟文土器」がある。この他には、郡山市山ノ神遺跡（鳴原1994）、田村市江ノ上B遺跡（江ノ上B遺跡1999）に見られる線刻礫なども認められる。

上ノ台A遺跡及び和台遺跡の「狩猟文土器」については、出土状況から住居跡の埋没過程に廃棄されたと考えられ、土器の施文方法や特徴、出土状況や共伴する遺物などから、中期末葉に位置づけられている。特に和台遺跡の「狩猟文土器」は、土器の器形や文様構成が分かる貴重な資料である。県内で確認された「狩猟文土器」は東北地方の中では最も古く、県内以外では岩手県北上市館IV遺跡（館IV遺跡1993）の「狩猟文土器」のみである。

「狩猟文土器」の文様構成については先述したように、狩猟具及び狩猟対象動物、植物、人物などが認められるが、これらの文様構成及び施文手法や器形には、時期的な特徴をもつことが報告されている。（小山1997、成田1998、福田1998、和台遺跡2003）

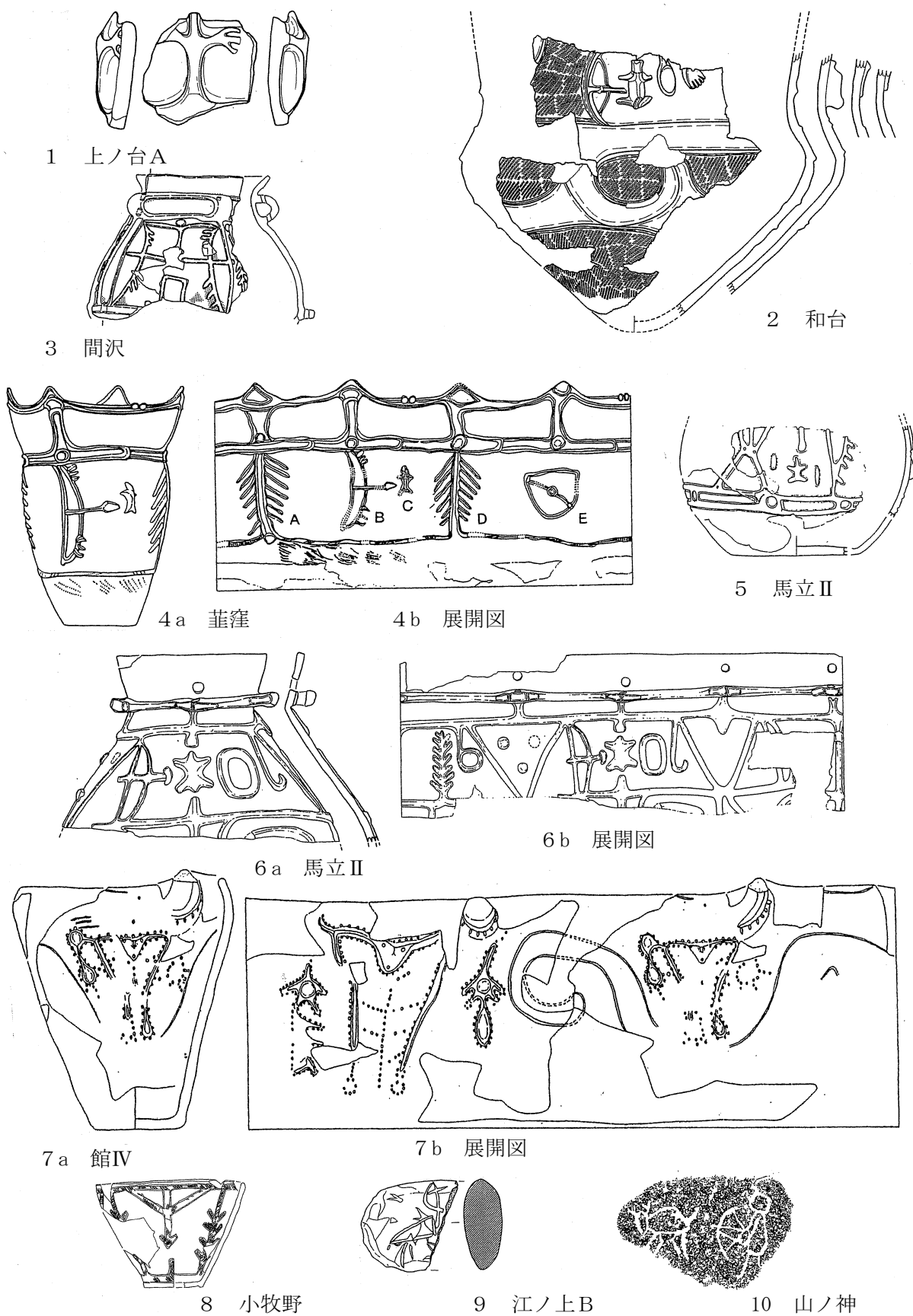
文様を中心に時期的な特徴を見てみると、中期末葉では、出土数は少ないが和台遺跡のように狩猟具、狩猟対象物、人物などを組み合わせ、ストーリー性を持たせるものが認められる。また、後期初頭～前葉では、青森県八戸市葦窪遺跡（葦窪遺跡1983）や岩手県二戸市馬立II遺跡（馬立II1988）のようにストーリー性を持つが文様構成の組み合わせが少なくなり、青森県青森市小牧野遺跡（小牧野遺跡1996）のように単独の文様として施文される土器もある。

高木遺跡から出土した狩猟文を持つ土偶については、土偶と土器、施文方法（隆帯と沈線）などの相違はあるものの、これら東北地方から出土する「狩猟文土器」の文様構成（人物・狩猟道具・狩猟対象物）と同じ構成を持つ。新井達哉氏は和台遺跡の報告の中で、「東北北部の狩猟文と時期的な違いは認められるが、狩猟・動物儀礼に関わる祭器として土器が東北地方南部と北部で共通していた」点を指摘している。（和台遺跡2003）

## 3) 文様の系譜（図4）

高木遺跡の狩猟文を持つ土偶の文様については、先に述べたように「狩猟文土器」と施文方法や対象物に相違はあるものの、同様の文様構成を持つようである。ここでは、狩猟文を持つ土偶の文様の系譜について述べてみたい。

高木遺跡の狩猟文土偶の文様系譜については、筆者が報告書（高木遺跡2003）の中でも指摘したように図4-1～4の福島市月崎A遺跡出土土偶（月崎A遺跡3・4次1991、6・18次1997）



(S=1/6 ただし、1, 9はS=1/3)

図3 東北地方の狩猟文遺物

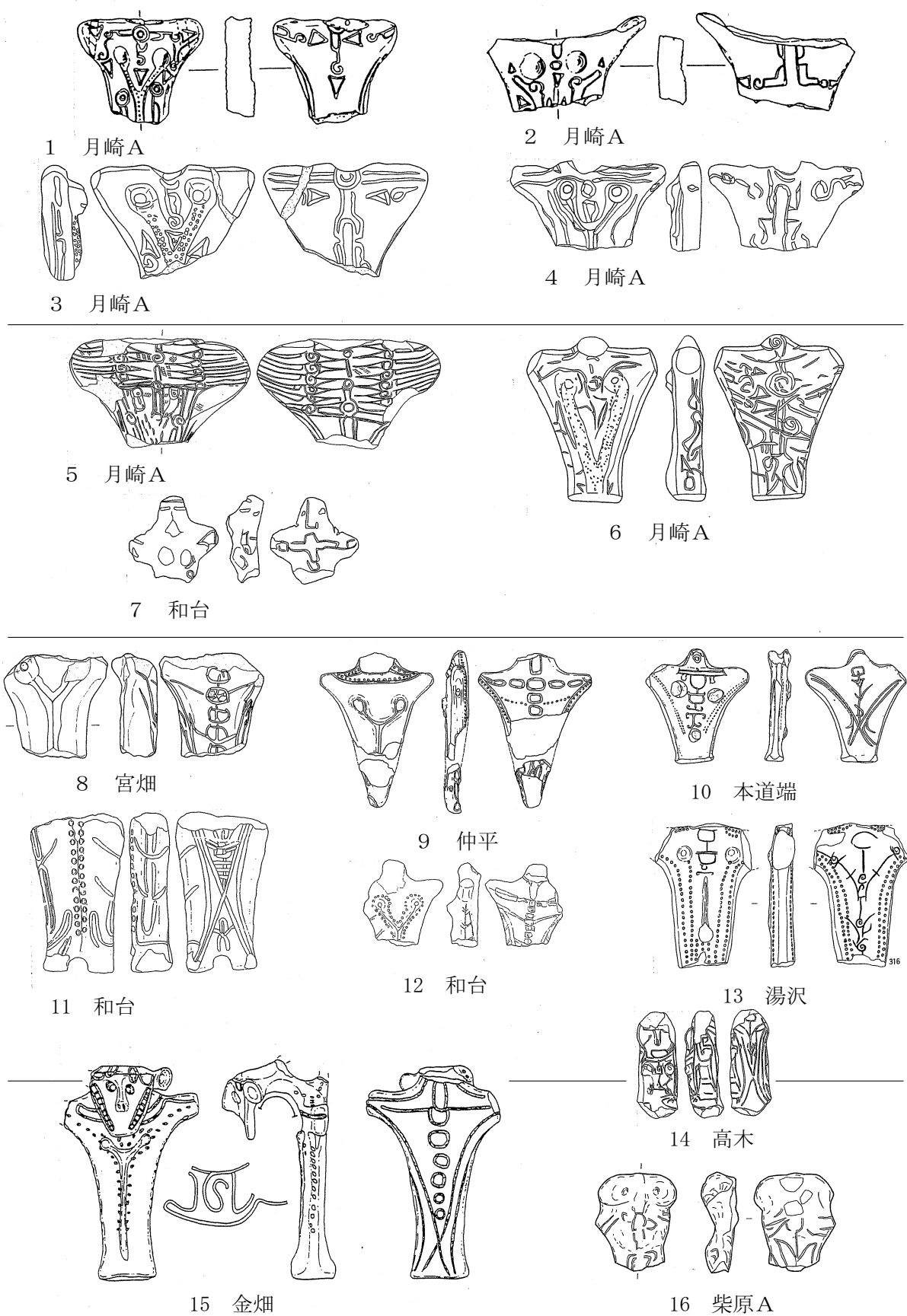


図4 文様の系譜

に施文された「同心円」、「5字状文」、「三角文」（伊藤・八巻 1969）に求めた。

同図 1～4 については、中期中葉に位置づけられるが、3・4 では文様に簡略化が認められることから、同時期ながらも時間差を持つものと考えている。

県内の土偶については、相原淳一氏（大梁川遺跡・小梁川遺跡 1988）、山内幹夫氏（山内 1992）、上野修一氏（上野 1997）により詳細な検討が加えられている。中でも、上野氏は東北地方南部の中期後葉から後期初頭の土偶に施文された文様を系列化し、各系列の時間的な位置づけをまとめ、月崎 A 遺跡出土土偶の文様「同心円」、「5字状文」、「三角文」については、中期後葉～末葉にかけて東北地方北部に見られる土偶の文様に影響を与えたことを指摘されている。（上野 1997）

図 4 には、県内出土の土偶を中心に「同心円」、「5字状文」、「三角文」を系譜とする土偶について集成した。遺構に伴って出土するものが少ないため、各時期の設定については、時間幅を持たせている。1～4 については、大木 8 b 式土器の文様のモチーフとなる剣先文・渦巻文・楕円形区画文との共通性から、山内氏・上野氏と同様に大木 8 b 式期と考えている。先述したように 3・4 については、文様が簡略化されているため、同時期の中でも 1・2 より、新しい時期に位置づけたい。

5～7 については、部分的に前段階の文様が残るものの簡略化され、各文様の連結も見られる。時期については、宮城県七ヶ宿町大梁川・小梁川遺跡（大梁川・小梁川遺跡 1988）第Ⅳ・Ⅲ層から、5 の形状と文様を持つ土偶が出土している。第Ⅳ・Ⅲ層は大木 9 式期に比定される土器を包含しており、5 については同時期に位置づくものと考えられる。また、7 は和台遺跡の大木 9 式期後半に位置づけられる竪穴住居跡のピット内から出土している。これらのことを踏まえ、5～7 については、大木 9 式期の範疇に収まるものと考えている。

8～13 は、5・6 に見られるような文様が整理され、高木遺跡の狩猟文土偶の文様と多くの共通性を持つ。特に 10 の秋田県比内町本堂端遺跡（本道端遺跡 1986）や 13 の岩手県都南村湯沢遺跡（湯沢遺跡 1983）の土偶の文様については、刺突文の有無などに相違はあるものの、両面の文様構成は、ほぼ一致する。

8～13 の時期は、8～12 の大半が大木 10 式期後半の住居跡堆積土から出土し、13 についても遺構外からの出土ではあるものの、検出された遺構と遺物の多くが大木 10 式期に位置づく。これらのことから、8～13 については大木 10 式期後半の所産と考えている。

なお、11 の飯野町和台遺跡出土の土偶については、短いものの脚部が意識的作り出されていることから、中期末葉～後期初頭に位置づくものかも知れない。15 の二本松市金田遺跡出土の土偶についても、板状土偶で脚部が台状を呈しているものの、後出する「ハート形土偶」に見られる顔を突き出すような表現（頸部から頭部に見られるアーチ）もあり、中期末葉～後期初頭の所産と考えられる。

16 は三春町柴原 A 遺跡（柴原 A 1 次 1989）の包含層から出土した土偶で、前段階（8～13）の文様が簡略化されている。時期については、包含される遺物などから、後期初頭～前葉に位置づけられる。この時期以降、「同心円」、「5字状文」、「三角文」の系譜をなす文様が認められ



なくなることから（上野 1997）、16 については、この文様系譜の最終形態と考えている。

高木遺跡出土の狩猟文土偶の時期については、報告時に文様の系譜や後期初頭～前葉と判断した高木遺跡出土の土偶に文様が施文されていないことなどから、中期末葉後半と位置づけた。しかしながら、この文様の系譜は、他地域においては後期初頭まで受け継がれていることや、顔の形状が「筒形土偶」や「ハート形土偶」の特徴に近似することなどから、中期末葉～後期初頭の範疇で捉えておきたい。

## 4 おわりに

以上、高木遺跡から出土した狩猟文を持つ土偶について、文様及び系譜について簡単に述べてきた。文様については、中期末葉～後期前葉に東南北部（福島県）と北部（青森県、岩手県）を中心とした地域に認められる「狩猟文土器」と同じ構成を持つ。文様の系譜については、月崎 A 遺跡出土土偶に認められる大木 8 b 式期の「同心円」、「5 字状文」、「三角文」を祖形とし、文様の系列化の中で狩猟文が生み出されたものと考えた。また、これらの文様が東南北部の本道端遺跡、湯沢遺跡の土偶の文様にも認められ、東南北部にまで文様の影響があったことが窺える。（これらの文様については、宮城県白石市菅生田遺跡、山形県遊佐町神矢田遺跡出土の土偶にも認められる。）

このように、東南北部と南部においては、「狩猟文土器」ばかりではなく、「土偶」といった縄文時代の「マツリ」に関係する道具が共通性を持つことは大変興味深い。「狩猟文土器」と「土偶」これらの道具に共通する点は、狩猟・採集を中心とした縄文社会の中で、安定した「恵み」とその再生を願うものであろう。

これら「狩猟文」が認められる縄文時代中期末葉～後期前葉にかけては、気候変動による大きな環境の変化（安田 1994）があったものと考えられている。高木遺跡でもその痕跡が認められる。遺跡は中期末葉～後期前葉にかけて、阿武隈川の度重なる洪水を受けている。後期前葉には大規模な洪水に見舞われ、集落全体が砂に覆われ、終焉を迎える。この後、古墳時代まで高木遺跡に集落は営まれていない。このような被害を受けた事例は、福島市や郡山市、三春町の阿武隈川やその支流に所在する各遺跡でも認められる。

こうした縄文社会の中で、狩猟・動物儀礼を目的とした「狩猟文土器」が東南北部の一地域と北部で作られ、高木遺跡では、「土器」から「マツリ」の道具である「土偶」にキャンパスを代え、安定した「恵み」とその再生を願い込めて、狩猟文を持つ土偶が生み出されたものと考えられる。（高木遺跡では、中期末葉～後期初頭の時期に、複式炉を伴う住居跡から石囲炉及び敷石住居跡への変化、配石遺構の増加など、集落の変遷を辿る上で大きな画期となる時期である。このことは、大木文化の終焉とも重なる。）

今回は、狩猟文土偶の文様系譜などの報告に留まった。本来は系譜となる文様を持つ土偶が出土する東北地方全ての遺跡や関係する遺構、共伴する土器（施文道具や施文方法）について詳細な検討を加え、縦横の時間軸の設定、当該時期の土偶以外の「マツリ」に関する道具との関係などについても明らかにすべきであった。また、次の機会に再整理し報告できればと思う。

最後になりましたが、本報告をするにあたり多くの方々のご協力を得た。中でも東北地方の土偶については山内幹夫氏、本間宏氏に、高木遺跡の狩猟文土偶の文様については吉田秀享氏にご教示・ご助言をいただいた。末尾ながら、この場を借りて御礼申し上げます。

<参考・引用文献>

- 青森県教育委員会 1983『葦窪遺跡』  
青森県教育委員会 1983『牛ヶ沢（3）遺跡』  
青森県教育委員会 1985『沖附（2）遺跡』  
青森県教育委員会 1985「間沢遺跡」『今津遺跡・間沢遺跡』  
青森県教育委員会 1987『上尾沢（2）遺跡Ⅱ』  
青森県教育委員会 1990「西山遺跡」『雷遺跡・西山遺跡』  
青森市教育委員会 1996『小牧野遺跡発掘調査報告書』  
飯野町教育委員会 2003『和台遺跡』  
伊藤玄三・八巻正文 1968「福島市月崎出土の土偶」『考古学雑誌』第53巻第4号  
（財）岩手県埋蔵文化財センター 1983『湯沢遺跡発掘調査報告書（遺物編）』  
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1988『馬立Ⅱ遺跡発掘調査報告書』  
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1988『米沢遺跡発掘調査報告書』  
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1988『館Ⅳ遺跡発掘調査報告書』  
上野修一 1997「東北地方南部における縄文時代中期後葉から後期初頭の土偶について」『土偶研究の地平』  
江坂輝彌 1990『日本の土偶』六興出版  
大越町（現田村市）教育委員会 1998『大越・岡平遺跡』  
大越町（現田村市）教育委員会 1999『大越・江ノ上遺跡』  
小山彦逸 1997「縄文時代の狩猟文について」『青森考古学』10  
小林達雄編 1988「縄文土偶の世界」『季刊考古学』30 雄山閣  
国立歴史民俗博物館編 1992「土偶とその情報」『国立民俗博物館研究報告』第37集  
佐原真 1997『原始絵画』講談社  
鳴原靖彦 1994「山の神遺跡採集の線刻礫」『福島考古』35  
成田滋彦 1998「縄文時代後期の動・植物意匠文」『北方民族学研究』6  
能登健 1995「土偶」『縄文文化の研究』9  
八戸市教育委員会 1984『丹後谷地遺跡（1）（2）』  
原田昌幸 1995「土偶」『日本の美術2』345 至文堂  
比内町教育委員会 1986『本堂端遺跡』  
藤沼邦彦 1997『縄文の土偶』講談社  
宮城県教育委員会 1982「菅生田遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告Ⅶ』  
宮城県教育委員会 1988『大梁川遺跡・小梁川遺跡』  
（財）福島県文化財センター 1989「柴原A遺跡（第1次）」『三春ダム関連遺跡発掘調査報告2』  
（財）福島県文化財センター 1990「仲平遺跡（第3次）」『三春ダム関連遺跡発掘調査報告4』  
（財）福島県文化財センター 1990「上ノ台A遺跡（第2次）」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告ⅩⅣ』  
（財）福島県文化振興事業団 2003「高木・北ノ脇遺跡」『阿武隈川右岸築堤遺跡発掘調査報告3』  
（財）福島市振興公社 1991「月崎A遺跡」『飯坂南部土地区画整理事業関連遺跡調査報告Ⅰ』  
（財）福島市振興公社 1994「月崎A遺跡」『飯坂南部土地区画整理事業関連遺跡調査報告Ⅳ』  
（財）福島市振興公社 1997「月崎A遺跡」『飯坂南部土地区画整理事業関連遺跡調査報告Ⅴ』  
（財）福島市振興公社 2006『宮畑遺跡（岡島）』  
福田友之 1998「狩猟文土器再考」『北方の考古学』  
安田喜憲 1994「気候変動」『縄文文化の研究』1  
山内幹夫 1992「福島県の土偶」『国立民俗博物館研究報告』第37集  
遊佐町教育委員会 1972『神矢田遺跡』